

# 厚内・斎藤兵一郎邸の調査について

後藤秀彦・安藤忠司・三浦道春

## I. はじめに

従来から、十勝郡浦幌町字厚内1番地内に所在する斎藤兵一郎邸は、その特異な建築様式と厚内という土地柄から識者の注目を集めていた建造物である。この建造物が概ね明治末期ごろに斎藤兵太郎（初代）によって建築されたことは、孫に当る斎藤兵一郎氏の談話や、『十勝国産業写真帖』掲載の写真によっても明かであったが、建築学上の意義や、正確な建築年代については不明な点が多くあった。

しかしながら、浦幌町教育委員会では十勝のみならず北海道の木造建造物学上、稀有の物件であると考え、種々資料の収集に当っていたが、建造物の構造等を知る必要が生じたので社北海道建築士会十勝支部東十勝分会にその調査を依頼していた。この依頼に基づき、同会では1984年3月6日現地調査を実施し、現況の把握と図面の作成に当ったが、翌1985年2月一応の図面調整等の作業が完了したので、この成果品（図面・写真）を教育委員会に提出した。

これを受け、筆者らはこの建造物の歴史学上の意義と建築学上の意義について検討した。この報文はそれらの検討事項を現在知れる範囲でまとめたものである。

なお、この報文をまとめるに当たり社北海道建築士会十勝支部東十勝分会の高橋一郎会長はじめ会員各位から多大なご教示を賜った。ここに銘記して感謝申し上げたい。

## II. 斎藤兵太郎（初代）の経歴

この建造物の建築者でもあり居住者でもあった斎藤兵太郎は、1856（安政3）年9月25日、渡島国松前郡福山下町にて勝見栄吉の3男として出生した。1867（慶応2）年3月、13歳のときに斎藤清五郎へ入籍。妻は渡島国函台町久保要右エ門の2女ツク（1860（万延元）年9月23日生）。幼少より松前候の側近で小姓・佑筆係として仕えていたが、1868年の明治維新後、函館田畠商店に勤務した。広業商会函館支店勤務を経て、1880（明治13）年、24歳のときに広尾出張所主任となった。1883（明治16）年広尾出張所が廃止となると、そのまま広尾にとどまり鮭漁業・昆布採取業及び太物商を営んでいたが、1886（明治19）年大津へ転住、鮭漁業を営むようになり、初代の大津郵便局経営も行ったという。さらに、帯広で酒店を経営した。1887（明治20）年5月、石黒林太郎・大内平八郎・阿部徳松と協議し、「十勝産馬改良組合」を設立したが、明治23年解散。1888（明治21）年、十勝・中川両郡の漁業者18名で「十勝漁業組合」を結成し、初代頭取となる。翌1889（明治22）年、打内に鮭建網を経営し、400余石をとり、一般漁業者を驚かせたという。1891（明治24）年の「十勝中川二郡漁場継続営業表」によれば、斎藤兵太郎の漁場は、十勝郡大津村海岸8番地と十勝郡大津村海岸の2カ所で、前者は明治22年7月15日～明治24年12月までの建網、後者は明治23年9月9日から無期限で曳網であった。同年4月、北海道庁は産馬改良の必要性から種雄馬を輸入して民間

## 目 次

厚内・斎藤兵一郎邸の調査について ..... 後藤秀彦・安藤忠司・三浦道春 ..... 2

表紙写真 安骨チャシ跡

豊頃町にあるこのチャシは、築造当時周壕をもった丘頂式のもの

であったと思われるが、現在は一部を残し壕は埋覆されている（後藤秀彦）。

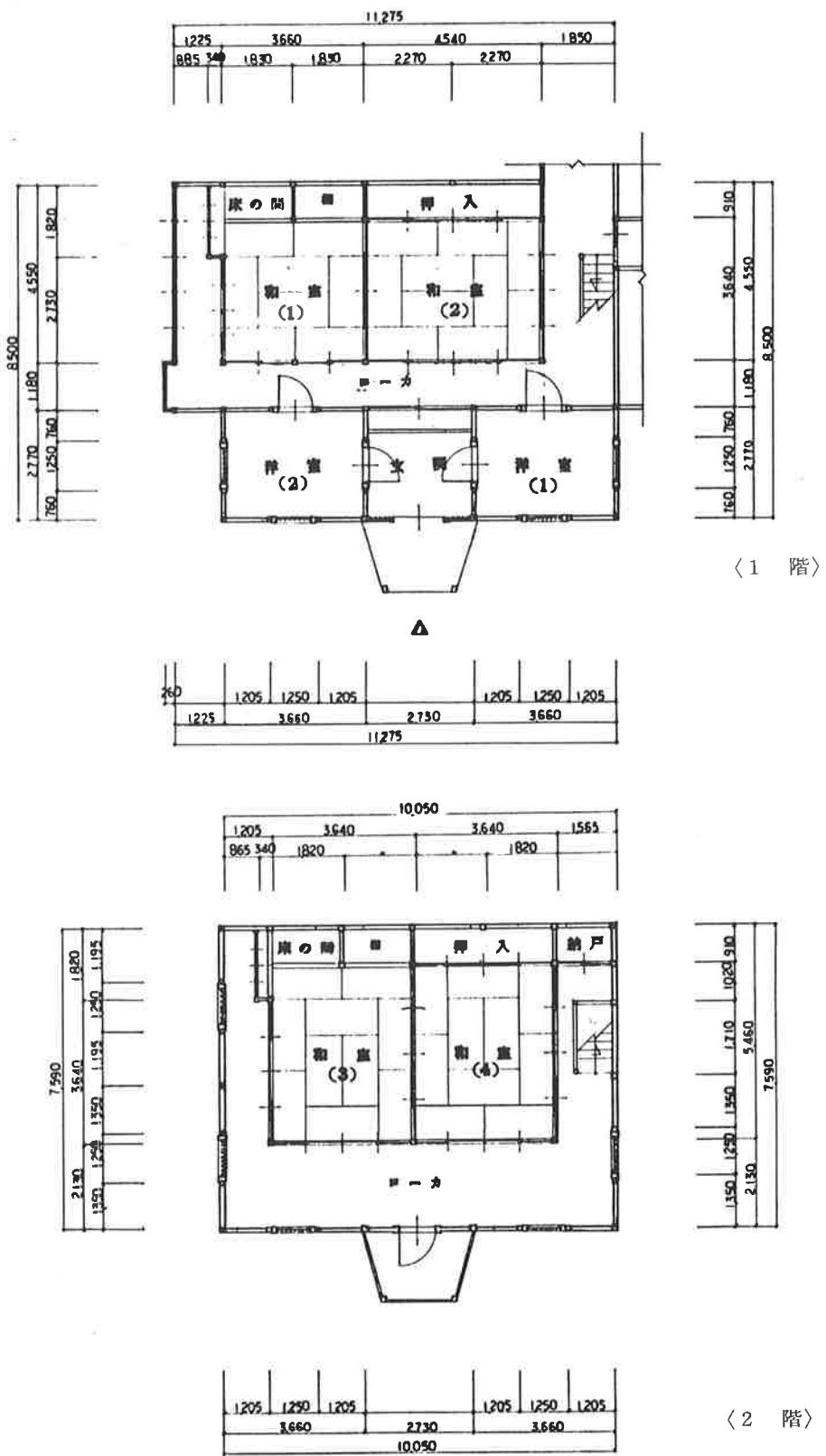


Fig. 1 2階建部分平面図

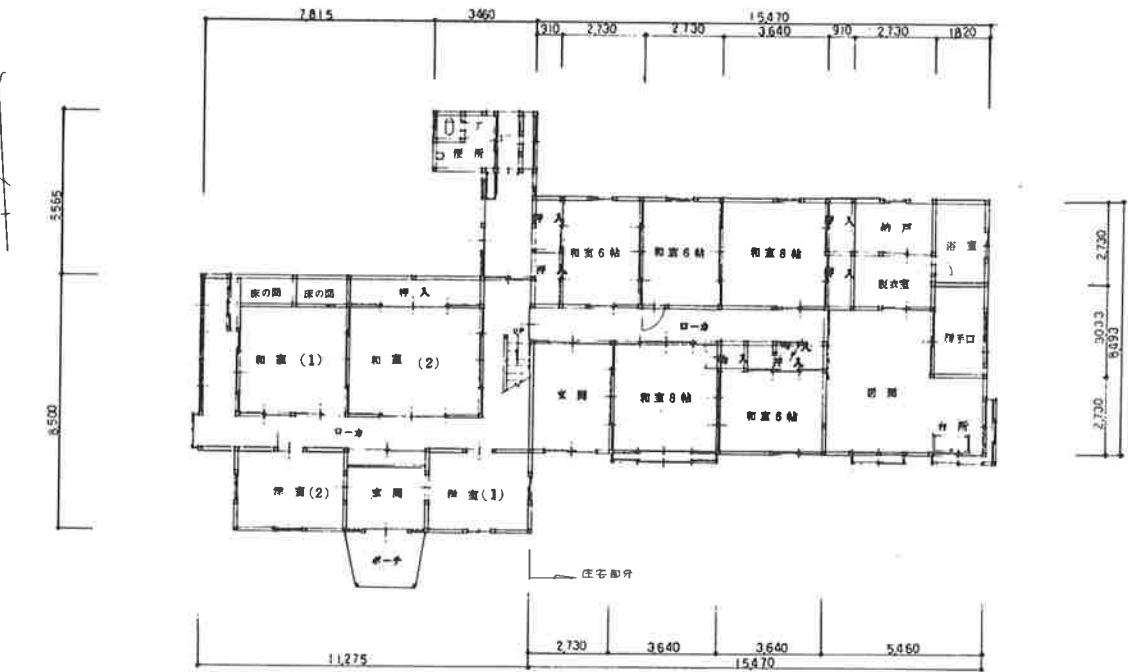


Fig. 2 全体平面図

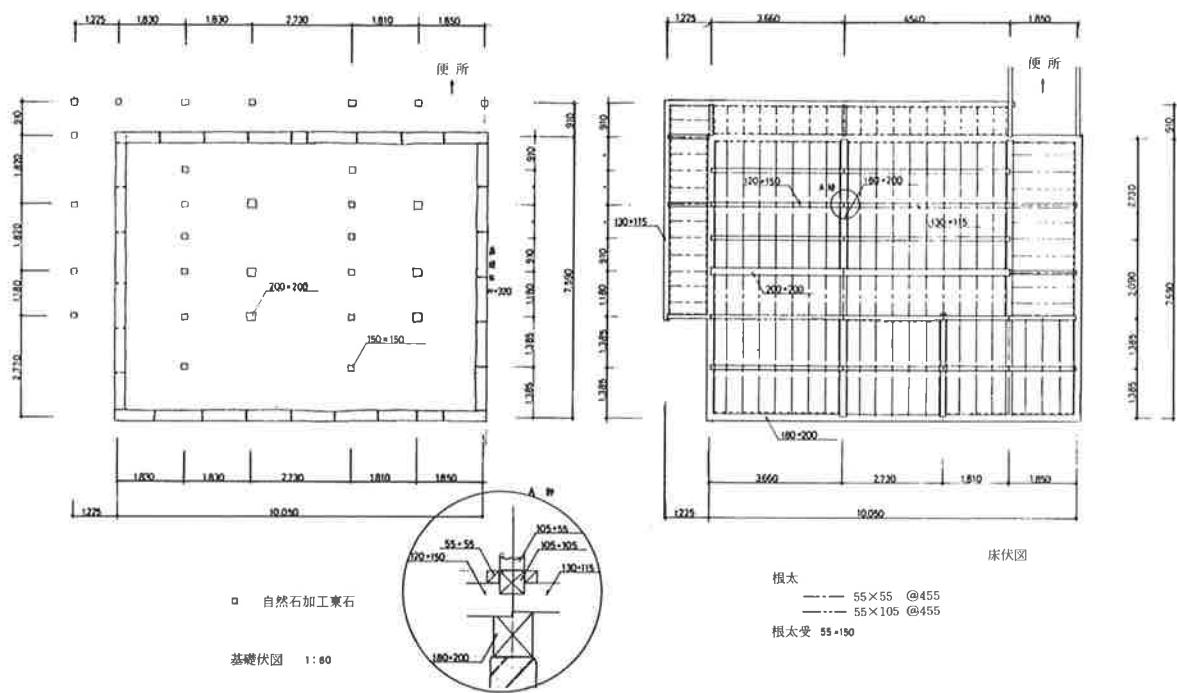


Fig. 3 基礎伏図および床伏図

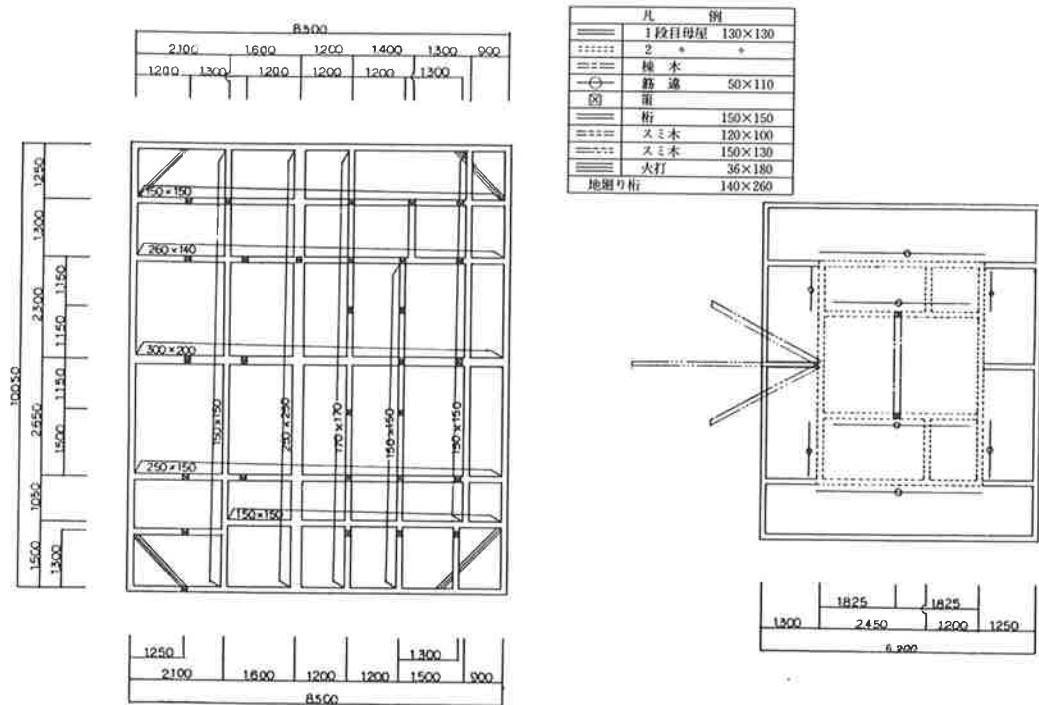


Fig. 4 小屋伏図および母屋伏図

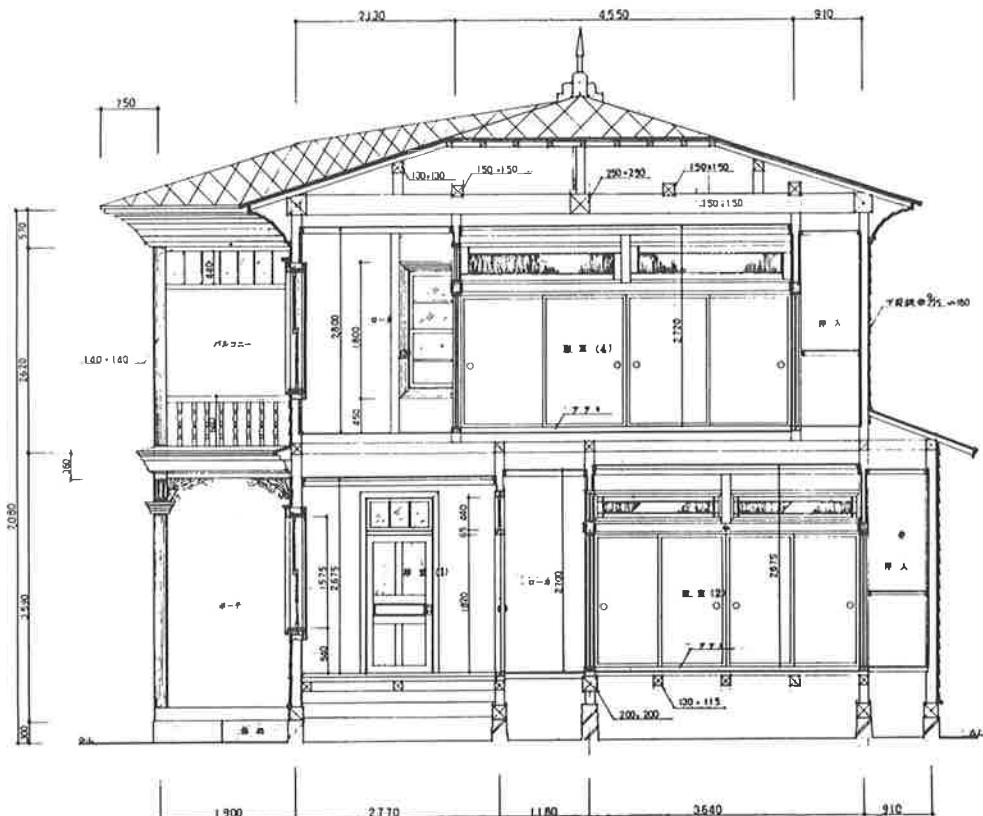


Fig. 5 矩計図

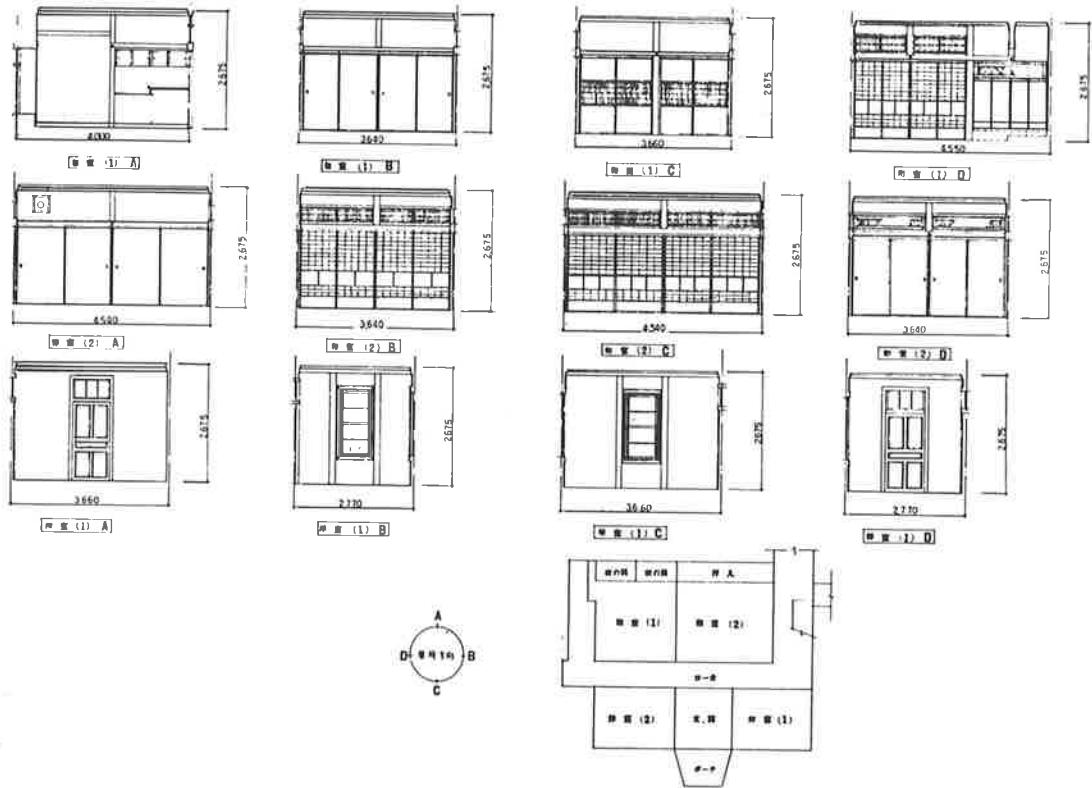


Fig. 6 展開図 (1階)

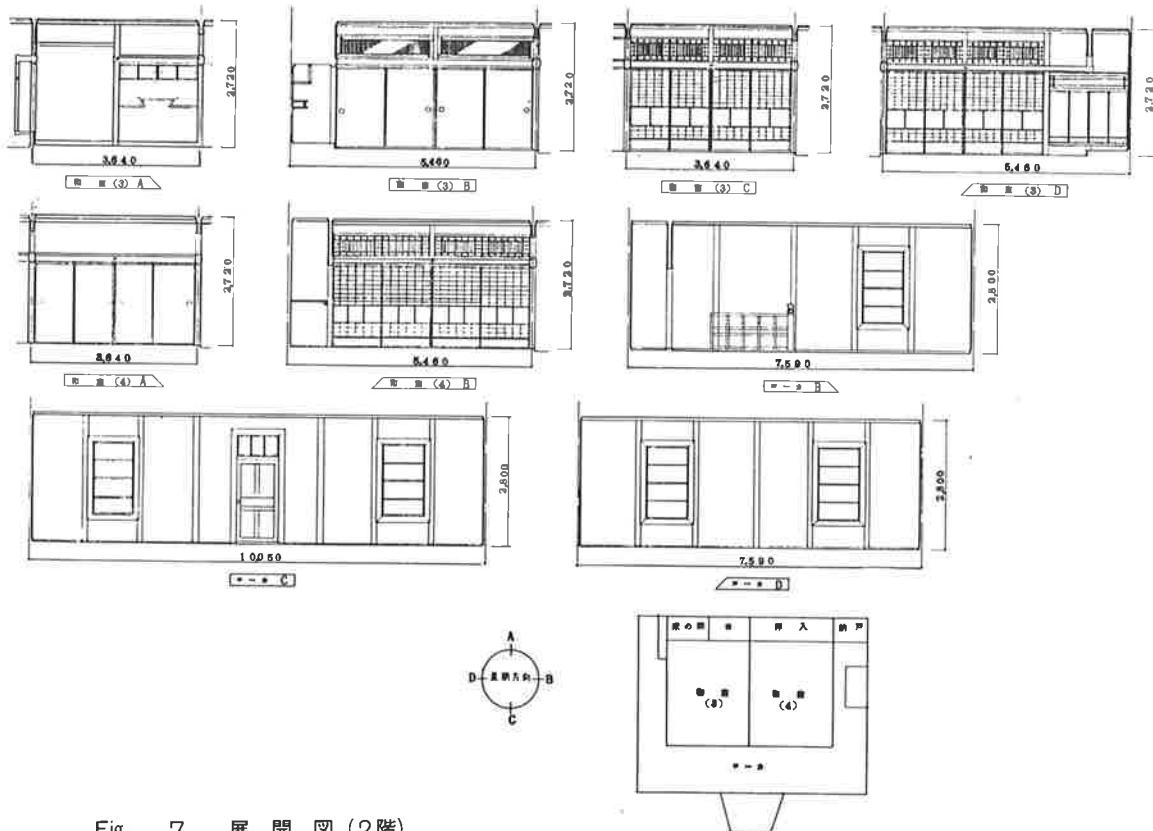


Fig. 7 展開図 (2階)

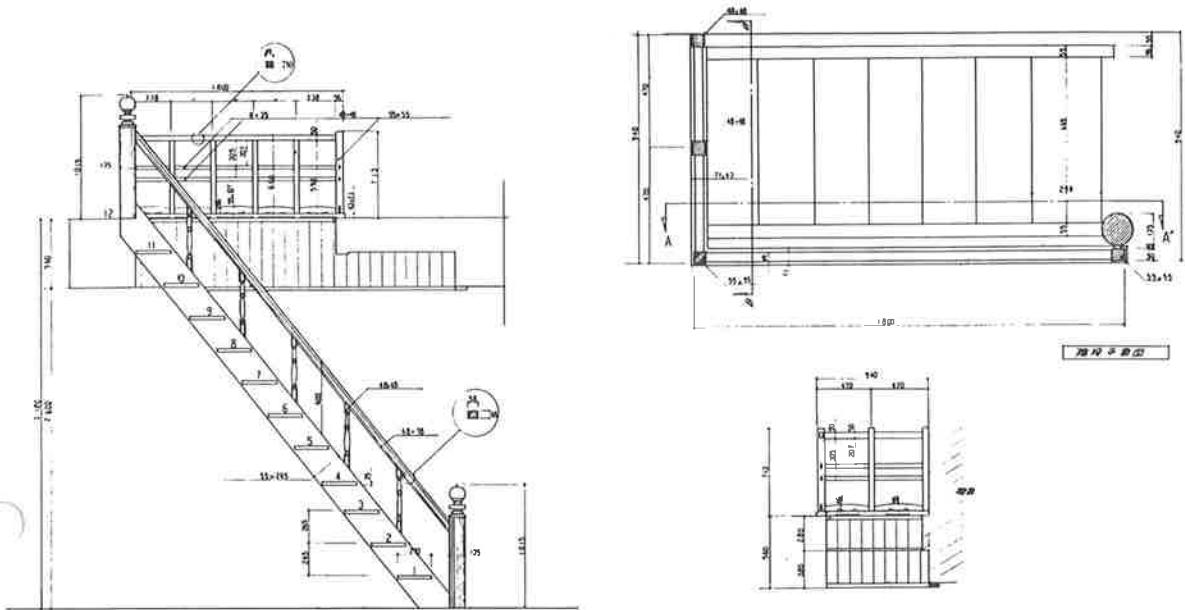


Fig. 8 階段 詳細図・平面図

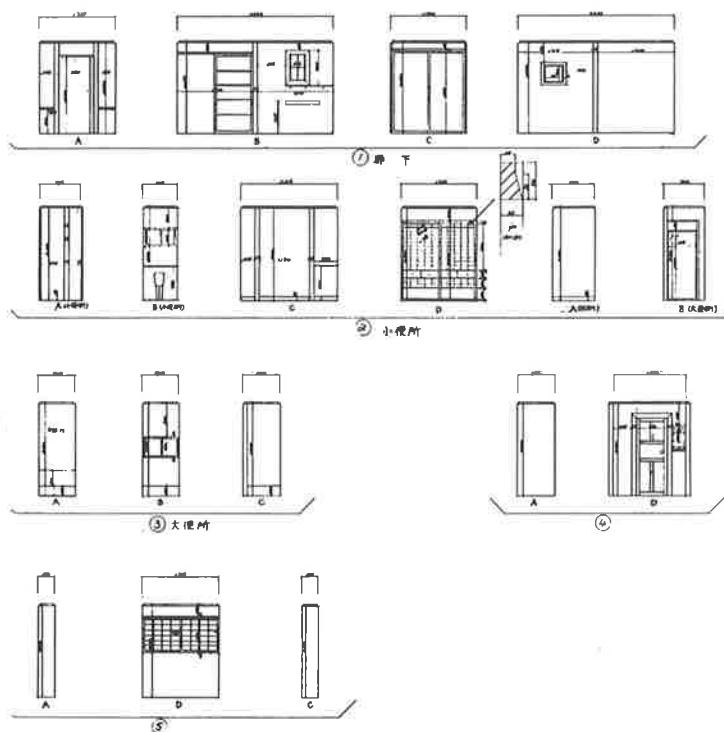


Fig. 9 便所展開図

に貸付ける制度を設け、第二手稻号を晩成社に、第二ダブリン号を斎藤兵太郎に貸付けたがこれが十勝における産馬改良の第一歩であった。

1899（明治32）年、十勝漁業組合（頭取・斎藤兵

太郎）は大雨と落雷によって消失した札内川支流ヌップクマップ川に鮭孵化場を再建、これにより孵化事業は軌道に乗ることになった。

1903（明治36）年、牧畜を目的に厚内へ転住。1906（明治39）年6月17日、発起人26人、参加者363人をもって「十勝産牛馬組合」設立総会を帯広・永祥寺で開催。斎藤兵太郎は副組長となる。同年9月8日設立認可。1921（大正10）年4月「大津漁業組合」の設立に同意。1923（大正12）年1月10日、「十勝無尽株式会社」（北洋相互銀行帯広支店の前身）の設立に参画し、取締役に就任。1927（昭和2）年2月7日、帯広にて逝去。享年71歳。

なお、兵太郎は晩年、帯広町大通5丁目で煙草の元売捌を兼営し、帯広川の西一条橋・大通橋間北側のあたりは大戦前「斎藤公園」と呼ばれるスモモの多い小公園であったという。

以上のように、波乱に富んだ兵太郎の生涯は、広尾・大津・厚内と転住していく中で、鮭漁業と馬産業に集約されていく。

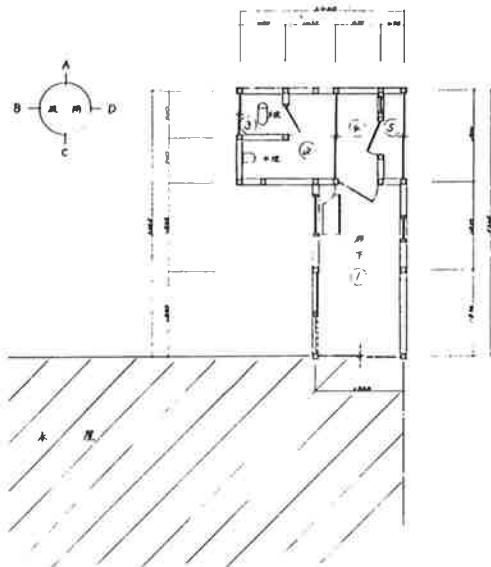


Fig. 10 便所平面図

この中で最も興味深いのは、本稿にも関連のある厚内への転住年である。各種文献に当たった限りでは、1903（明治36）年であり、当時の兵太郎の資金力を考えると、建物が完成すると同時に移転したと考えるのが穩当であろう。

なお、今回の調査の際、屋根裏に上り棟札を探したが、見当らず建築年を物的に確定できなかつたので付記しておく。

### III. 斎藤邸の実地調査

（社）北海道建築士会十勝支部東十勝分会の調査は1984年3月6日行われた。調査に参加したのは次の11名である。

- ・高橋 一郎（高橋建築株式会社・（社）北海道建築士会十勝支部東十勝分会長）
- ・川村 忠（高橋建築株式会社）
- ・橋本 栄光（橋本建設工業株式会社）
- ・井上 始（橋本建設工業株式会社）
- ・上田 英俊（有）菅原組
- ・斎藤 隆次（今建設株式会社）
- ・北原 晃夫（有）北原建設
- ・杉江 豊則（豊頃町役場）
- ・三浦 道春（浦幌町役場）
- ・安藤 忠司（浦幌町役場）
- ・後藤 秀彦（浦幌町郷土博物館）

調査は、現存する調査建物の実測及びスケッチと併行して建造物内外の写真撮影を行った。

なお、南側に並んで建っているレンガ造りの倉庫の実測も合せて行った。

### IV. 建造物の現況

斎藤兵一郎邸は、国鉄根室本線厚内駅北側に広がる白糠丘陵の麓にある「斎藤牧場」の中に建てられている。建物は木造一部2階建で、東西26.745m、南北14.065mの東西に狭長な形態を呈している。その他の実測数値は次のとおりである。

・建面積	209,64981m <sup>2</sup>
・延面積	285,92931m <sup>2</sup>
・2階建部分 1階面積	64,91255m <sup>2</sup>
・2階建部分 1階渡り廊下	6.77655m <sup>2</sup>
・2階建部分 1階便所	6.57400m <sup>2</sup>
・2階建部分 2階面積	76,27950m <sup>2</sup>
・1階建部分面積（便所除）	131,38671m <sup>2</sup>

なお、このほかに1階部分にはポーチ、2階部分にはバルコニーが付いている。

以上のように本建造物は、大きく2階建部分と平家建部分に区分することができるが、平家建部分には改築した痕跡が認められ、又『十勝国産業写真帖』掲載の写真とも窓ワク、屋根などの部分で相違があるので、今回は平面図を作成するにとどめ、調査の主体は2階建部分とした。

平面図のみとした平家建部分は、玄関・勝手口・和室8帖（2室）・和室6帖（3室）・居間・脱衣室・浴室・納戸・廊下および押入・物入からなり、本建造物の居住空間と考えられる。

さて、2階建部分は1階に洋室（2室）・和室（2室）・便所・廊下、2階に和室（2室）・廊下がある。この2階建部分の基礎には自然石の軟石を使用、所々に喚気口が設けられ、その上に土台が載せられている。玄関は両開きのドアで、欄間に赤・黄・青の色ガラス計4枚（青が2枚）が入っている。玄関を入って、両側は面積10.1382m<sup>2</sup>の洋室となっており、ここの欄間にも赤・黄・緑の色ガラス各1枚がはめこまれている。奥へ入ると西側に8帖、東側に10帖の和室があり、前者には床の間、附書院、後者には押入れが設けられている。8帖間と10帖間の境には襖が入っており、他の面の建具は明障子である。8帖間の長押にはモミジガサ様の釘隠、10帖間の長押にはガシをあしらった釘隠が取り付けてある。各欄間には手のこんだ格子がはめこんである。

2階は和室10帖が2間である。この和室をとり囲むように東～南～西に廊下が設けられ、南にバルコニーへ出るためのドアが取付けられ、欄間に黄・赤・緑、各1枚の色ガラスがはめこまれている。南面するバルコニーの上面にはガラスがはめこまれており、手すりがついている。手すりの手すり子はロクロ仕上げのものであり、その下部には飾意匠がある。和室の2室は面積は異なるが構造は全く同じである。

1階部分にある便所と渡廊下は後年増築されたものようである。

また、窓はすべて揚戸となっており、額縁が付けられている（増改築した部分を除く）。

## V. 総括

以上、述べてきたことなどを要約すると次のように集約される。

- ①建築主は斎藤兵太郎（初代）である。
- ②建築年は1903（明治36）年であると思われるが、確定はできない。
- ③建造物の面積は次のとおりである。
  - 延面積 285.92931m<sup>2</sup>（約86.6坪）
  - 建築面積 209.64981m<sup>2</sup>（約63.5坪）
- ④外壁は薄い緑色である。
- ⑤窓は揚戸を使用している。
- ⑥外観は洋風であるが、内部は和風である。
- ⑦平家部分は全面的に改築されている。
- ⑧便所および渡廊下は後年増築したものと思われる。
- ⑨2階にはバルコニーが付けられている。

⑩4カ所に色ガラスがはめこまれている。

⑪材料の大部分は雑木が使用されている。

⑫屋根飾りは当初のものは失われており、屋根も柱からトタンに変えられている。

⑬和室の長押などに雁・モミジガサに似た釘隠が多用されている。

⑭1階および2階の和室の西側には附書院が設かれている。

⑮基礎に自然石の軟石を使用し、所々に喚気口が設けられている。

⑯1階西側に戸袋が取付けられ、松竹の紋様が刻まれている。

⑰建築時に使用した測定単位は、尺およびインチと考えられる。

(×浦

幌町郷土博物館学芸員・\*\*浦幌町経済部都市建設課建築係長・\*\*\*浦幌町経済部都市建設課技師)

## 参考文献

榎本守恵（1978）「新広尾町史」1 広尾町

太田博太郎編（1967）「民家のみかた調べかた」

### 第一法規

帯広市編（1984）「帯広市史」 帯広市

河西支庁編（1911）「十勝国産業写真帖」 河西支庁

豊頃町編（1971）「豊頃町史」 豊頃町

北海道建築士会編（1979）「北海道の古建築物と街並み」 北海道建築士会

山口菊雄（1971）「浦幌町史」 浦幌町



PL. 1 『十勝国産業写真帖』掲載の全体写真



PL. 2 左の写真の拡大写真



PL. 3 現況全景写真



PL. 4 正面



PL. 5 裏面



PL. 6 便所



PL. 7 土台



PL. 8 ポーチ土台



PL. 9 2階バルコニー（下から）



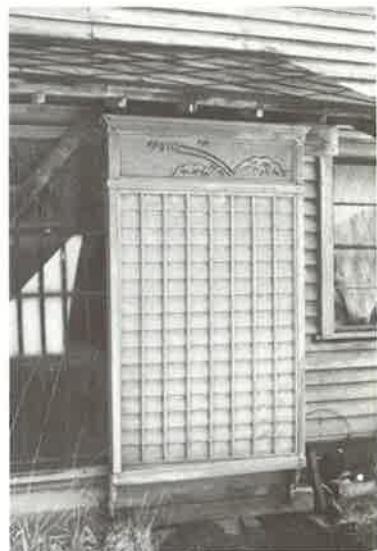
PL. 10 バルコニー下の飾り



PL.11 バルコニー・玄関



PL.12 窓 框



PL.13 戸 袋



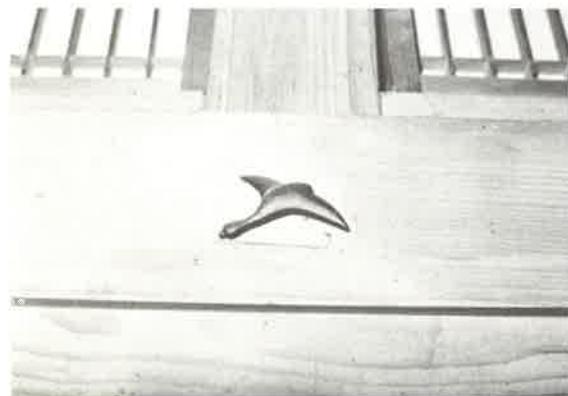
PL.14 便 所



PL.15 階 段



PL.16 バルコニー出入口



PL.17 和室の釘隠



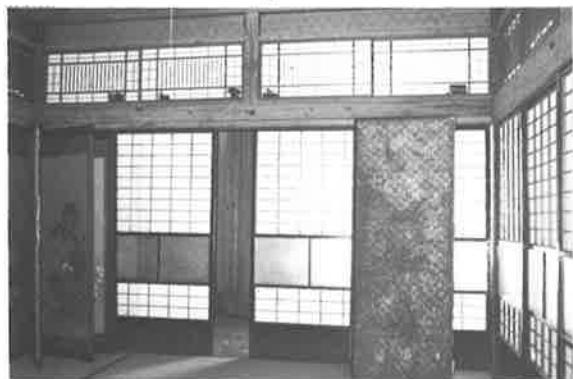
PL.18 和室の釘隠



PL.19 1階附書院



PL.20 2階床の間・附書院



PL.21 2階和室建具等



PL.22 小屋組(一部)



PL.23 平家部分全景



PL.24 2階建部分とのとりつけ



PL.25 レンガ造物置

1985年3月10日 印刷  
1985年3月20日 発行  
編集後藤秀彦  
発行責任者 家村克行  
発行所 浦幌町郷土博物館 (089-56)  
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1  
印刷所 大同出版紙業株式会社 (080)  
北海道帯広市西7条南6丁目